

まちづくり ひろしま

被爆100年(西暦2045年)の姿をめざして

第19号(平成27年9月15日)

読者数：538名(募集中)

メールアドレス：hirosima.idea.c@urban.jp

〒733-0002 広島市西区楠木町1-9-7

発行人：前岡智之、編集人：瀧口信二

配信元：広島アイデアコンペ実行委員会

ご提案・ご意見等は、こちらまで

□巻頭言

土砂災害と地域コミュニティを考える

広島工業大学工学部建築工学科教授
福田 由美子



大学の学部から大学院を通しての研究テーマは、主に集合住宅計画の観点から居住地のマネジメントのあり方を考えることだった。長年居住する中で構築されてきた古い公営住宅でのマネジメントの作法や、住み手主体で設計されたコーポラティブ住宅での独創的なマネジメントなどを対象として、研究を行ってきた。居住地マネジメントを考えることは、そのベースとなる地域コミュニティを考えることと等しく、学会等の建築計画の分野でも、盛んにコミュニティ論が語られていた。

しかし、時代の経過とともに地域コミュニティの衰退が叫ばれるようになった。福祉の問題や子育て環境、地域の安全性など、各方面から地域のつながりの必要性や重要性が指摘されているにもかかわらず、コミュニティの希薄化は進行し続けている。過去と比較して考えるならば、代々住み継いでいた家は一代限りのものとなり、農業等土地との結びつきが強い生業形態から土地や地域と関連の少ないサラリーマン稼業となり、多世代で同居していた家族は核家族化がさらに進んだ形の单身もしくは少人数家族となったことで、地域社会と結びつく場面が非常に少なくなった結果と言える。そしてその背景には、さまざまなサービスが高度に発達した便利で快適な生活の中で、煩わしいこと、面倒なことを避けたいという人々の意識の問題がある。

ここにきて、地域コミュニティについてあらためて深く考えさせられる出来事があった。昨年、広島に大きな被害をもたらしたあの豪雨災害である。日本都市計画学会中国四国支部では、「広島豪雨災害・防災まちづくり検証特別委員会」を組織し、土地利用と避難の側面から検証を行ってきた。その一員として検証作業にかかわる中で、地域コミュニティの課題を痛感することとなった。

阪神・淡路大震災や東日本大震災の経験以降、大規模災害に備え公助、共助、自助それぞれの対応が求められている。特に近年は、公助の限界を踏まえた上で共助として地域防災力の強化が課題となっている。これまで広島市においても、町内会や自治会を基本として自主防災組織が数多く結成されてきており、現在98.8%という高い組織設立率である。この度の豪雨災害において、避難という観点からこれらの自主防災組織がどのように機能し得たのか、いくつかの自主防災組織の役員さんに聞き取りを行った。

そこで伺った話を整理すると、形としては自主防災組織が整えられていたが、その活動内容は災害時に有効に機能できるようなものではなかったこと、組織としての対応はできなかった



読売新聞(2014/8/26付)より

が隣近所での助け合いや声の掛け合いは自然発生的に生まれたこと、被災した地域の自主防災組織の取り組みは現在ではより主体的な形でより実効性の高いものに変化していること、などが分かった。

その中でも特に課題と感じたのは、自主防災組織が町内会や自治会を基盤として作られている点である。自主防災組織を町内会と一体のものとして運用することは、防災を日常的な自治活動の一部として取り組むことができるという点で有効である。しかし、町内会の加入率が低い地域では、自治活動との連動が難しく防災組織が有効に機能しにくい。広島市全域の町内会加入率は平成 25 年度のデータで 63.3%である。自主防災組織の組織率が高くても、その母体となる町内会や自治会に加入していない人が多ければ、共助のネットワークに入らない人が多く残ることになる。実際に、今回被害が最も大きかった安佐南区梅林学区では、町内会への加入率が 50%程度の地域もあり、中には役員のみ手がなく実質的な活動はできていない町内会もあるということで、町内会と連動する形で自主防災を考えることの限界が指摘されていた。

これまで地域に関することを行う組織として町内会・自治会が存在し、実際にさまざまな役割を果たしてきたが、この地域自治の輪に入る人と入らない人が明確に分かれてきている。それ故に、従来の手法ではマネジメントできない状況が生まれている。住民参加のまちづくりにおいて、町内会に話を通したことで地元の理解は得られたとする構図がよく見られる。しかし多くの住民は、情報も得ておらず関心も持たないというのが実態だとも聞く。歴史的な経緯もあり、行政による地域自治に関する施策は、町内会を単位としたものにならざるをえないのが現状であるが、人々のライフスタイルが変化した今、新たな居住地マネジメントの方法が必要となっている。そしてこのことは、災害への対応のように人の命に関わる場面では、より深刻に捉えるべきである。町内会への加入促進の取り組みも必要であるが、町内会とは異なる主体の模索や町内会自体の改革など、地域自治のあり方を問い直すとともに地域を自らマネジメントできる主体を育てることが急務であろう。

ひろしまのまちづくりの動き

○ 66年ぶり平和の音色～「平和の鐘」響け再び記念式～

- ◆ 日 時：平成 27 年 8 月 6 日（木）午前 9：30～10：00 晴れ
- ◆ 場 所：中央公園・ハノーバー庭園となり
- ◆ 主 催：「平和の鐘」響け再び実行委員会

8 月 6 日の朝、広島合唱同好会（30 人）の「ひろしま平和の歌」合唱に続き、「平和の鐘」が 66 年ぶり「カーン、カーン」と広島
の空に鳴り響いた。この鐘は、昭和 24 年（1949 年）広島銅合金
鑄造会が広島平和記念都市建設法の制定を記念して広島市に寄贈
されたもの。現存する最古の「平和の鐘」だ。

“鐘の音をもう一度聞きたい”という鑄造会・遺族らの願いを伝
え聞いた「まちづくりひろしま」編集委員ら市民有志 10 人が実行
委員会を設立して企画した。

記念式には遺族、原爆市長・浜井信三ご子息ほか関係者約 130
人が参加し、順番に鐘を鳴らした。参加者の中には感動で涙を浮
かべる姿があり、また「今後も鳴らし続けてほしい」との声も多
く聞かれた。マスコミの関心も非常に高く報道関係 9 社の取材が
あり、大きくテレビ・新聞などで報道された。

実行委員会は、この記念式を毎年 8 月 6 日に開催していけるよ
う努力していきます。

ご支援・ご協力頂いた多くの皆様に心から感謝申し上げます。

（実行委員会代表 高東博視）



○広島復興の軌跡（第14回）～被爆70年企画～

遅れた広島中心部繁華街の復興

中四国一の繁華街といわれる広島市中区の本通り界限（胡通り・金座街・本通りの約1 km）は1日10万人の買い物客や行き交う人で賑わいを見せている。

この一帯は江戸期、広島城下を横断する「西国街道」の一部で、通りには「革屋町」「平田屋町」「細工町」「播磨屋町」など当時の町名を刻した石板が埋められている。

戦前も有数の繁華街だったこの一帯は1945年8月6日、爆心地から至近のところだったため、ほぼ壊滅状態になった。ランドマークだった下村時計店も1、2階が崩れ落ち、瀟洒（しょうしゃ）な時計塔は大きく傾き、無残な姿を晒（さら）した。

当時第五師団地区司令部の嘱託カメラマンだった岸田貢（後にキシダ写真館店主）は原爆投下による被災状況を克明に記録している。被爆直後の本通りの状況を岸田はRCC被爆40周年特別番組「瓦礫の中から～広島経済復興史～」で「それはもう惨憺（さんたん）たるもので、もう、言葉では言い尽くせないですね、まあ異臭も漂っていますしね。私が入って撮影したのが8月7日でございますが、その日の夕刻、帝国銀行（現アンデルセン）の横を通過して、裏門で、水槽の中に女の子がつかっておりましてね、その中に死体が二つくらいあったりして…」と“証言”している。



写真左が下村時計店
（林重男撮影）

「死の街」と化したところへ誰も帰ろうとしなかった。が、ようやく一か月後、本通りの世話役中山良一（中山楽器店）の呼びかけで安佐郡八木村（現：安佐南区八木）に家を持っていた林正夫（時宝堂）のところに約10人が集まり、皆の無事を確認するとともに街の再建を話し合った。翌年の1946年、この時集まった人を中心に結成されたのが草分会（広島本通商店街復興発起人会）である。草分会は焼跡の遺骨の収集、瓦礫の整理から本通りの再建に取り掛かった。その当時のリーダーだった中山は被爆40周年時にはすでになく、息子の彰が本通復興事務所のことについて次のように語っている。

「（父が）住宅営団に6畳一間の筵を敷いた家建ててもらって、そこを（本通りの）連絡場所にしました。本通り最初の家ですね。周りには家一軒ないものですから、風は吹き抜け、夜は野犬が人骨を食べているもんですから、うっかり外へも出れないという、どん底生活をしたわけです。しかし、ここがあったものですから、疎開された方、生き残った方、親戚の方が訪ねてこられて…、父が昔の本通りにしよう、20年、30年先を見据えた街にしようと、非常に熱意を持って呼びかけました。随分苦労しましたが」。中山などのリーダーの執念にも似た努力で1948年（昭和23年）には本通りの街並みが復活した。



昭和24年の本通り商店街
（佐々木雄一郎撮影）

「広島新史～経済編～」は、…昭和21年春ごろから、都心の本通り商店街も、つぎのように復興に着手している、として『広島原爆戦災誌』から引用している。

二十一年春ごろ、元本通り会は協同組合的精神によって、健全な明るく正しい商店街を再建する準備を進め、元安橋から八丁堀福屋百貨店に至る元の商店街へ、間口四メートル・奥行き一〇メートルの小さな商店と、それに付随して1坪小商店が、同じ色彩で立ちならぶ計画で、第一期二〇戸を八月六日までに、第二期七五戸を九月末までに建設することにした。

当時、広島市内唯一のデパート福屋百貨店の“復活”はさらに遅れた。

現在地の電車通り側に1938年（昭和13年）、福屋百貨店新館として建設された。鉄骨鉄筋コンクリート構造、地上8階地下2階、当時としては珍しく全館冷暖房完備、外装には淡黄

色のテラコッタを貼り付けてあるなど、その豪華な建物は「白亜の殿堂」と呼ばれた。その威容を誇った建物も爆心地から710mと近く、爆風と熱風で窓は吹き飛ばされ外郭を残して全焼した。被爆直後から一か月間、2、3階を伝染病舎（当初原爆症は赤痢だと勘違いされていた）として利用された。終戦後は2階を進駐軍が接收、解除となる1950年（昭和25年）まで使われた。



昭和23年の金座街
中央奥が福屋

福屋の営業開始は1946年元旦、清酒の立ち飲みコーナーからだった。元旦に入社した花房才治（1985年当時、常務）は当時の模様をRCCの特別番組「瓦礫の中から」で次のように述べている。

「…私は大八車で割り当ての酒を取りに行き、一階の一角に鉄道案内所があったんですが、そこにブリキなどで水槽を作り、焼跡から拾い集めたもので火を熾し、午後3時頃から一日400本、牛乳瓶に酒を入れ燗をしました。」その年の2月、福屋は「営業再開」の新聞広告を出した。花房「2月20日のオープンですね。私たちが直接仕入れたのは食料品、文房具、それから食堂もやっていましたね。あとは陶器、漆器、仏具そのほか家庭用品などですかね。なにもないですからこう台を組みましてね、その上に商品を並べて売りました。電気は八番線を引っ張りまして、そこに電燈を吊るした、というような状況でしたね」と曲がりなりにも営業を始めたものの2階はオーストラリア兵のサロンとして接收されたほか、そのほかの階も板で間仕切りして、貸事務所として企業に貸した。後に貸事務所の立ち退き交渉が難航、福屋が本来の姿に戻るのは1951年（昭和26年）のことである。

“白亜の殿堂”の復活は未だであったが、この中で大変なにぎわいを見せたのが、1946年5月、7階にオープンした福屋名画劇場である。戦後一気に洪水のごとく押し寄せてくる欧米文化に戦時下の“鬼畜米英”から解放された民衆は酔いしれた。名画劇場で上映されるディアナ・ダービンの「オーケストラの少女」「モロッコ」「望郷」などに熱狂した。名画劇場の経営者、水馬義輝（みづま工房社長）は当時の模様を特別番組で「トイレも仮設、階段にも窓ガラスもありませんから、寒いときには吹き曝しでしたが、お客さんは7階まで歩いて階段を上がって映画を観に来てくれました」「焼野原にぽつんと映画館ができたという感じでしたね。そこへ何十万の人が来て外国の映画を観て、青春時代の夢、感慨を持って一生涯を過ごしておられると思えば良い仕事をしたと思いますね」と語っている。

福屋は1954年（昭和29年）に全館復旧工事を完了、その後1985年（昭和60年）までに4回の増改築工事を行い、今日の姿になった。

1952年（昭和27年）、本通り境界の賑わいを伝える写真が「立ち上がるヒロシマ1952」にある。ロングスカートの女性、表情は明るい。自転車、オート三輪、進駐軍の兵士の姿も。まだアーケードはない。福屋側から金座街を南に望むとキリンピアホールが見える。最初のアーケードは1954年に掛けられ、1992年（平成2年）に架け替えられている。経済の高度成長とともに商店街の建物も木造から近代的なビルに建て替えられていった。その時間の経過とともに、原爆の傷跡も消える運命にあった。キリンピアホールは1989年に解体され、1993年にパルコに生まれ変わった。本通りのほぼ中央部にあった山口銀行本通り支店（被爆当時：大林組広島支店）は2002年（平成14年）に解体された。この建物は1923年（大正12年）、鴻池銀行広島支店として建てられたもので小規模なもののルネッサンス様式を基本としたデザインが施され、正面の三連の飾りアーチが印象的な建物であった。

広島アンデルセン（旧帝国銀行）は爆心地から360mのところ、大きな被害を受けたが、被爆した旧館部分を保存しながら今日に至っている。しかし、アンデルセンでは創業70周年の2018年（平成30年）までに全面建て替えをすることを決定、来年（2016年）1月には営業を終了、解体作業に入る予定だが、「東面、北面の被爆した外壁をできるだけ保存したい」としている。（文中敬称略）

（編集委員 三宅恭次）

○ 「時代を語り建築を語る会 (第9回)」報告 語り人：能登原由美氏

～広島音楽の場を語る～明治・大正・昭和を通して～

「ヒロシマと音楽」委員会の委員長であり、広島市被爆70年史の編修にも携わっている能登原氏に音楽の視点から広島の歴史について語ってもらった。

主催：時代を語り建築を語る実行委員会（代表：石丸紀興）

日時：2015年7月17日（金）18:00～20:00

場所：合人社ウエンディひと・まちプラザ

☆ 「ヒロシマと音楽」委員会とは

・被爆50周年の1995年に「ヒロシマと音楽」実行委員会を組織し、「ヒロシマ」や「原爆」、「反核」などをテーマとした音楽を掘り起こし、未来に継承するためのデータベース化を行う。2002年に実行委員会の有志による「同」委員会を結成し、同事業を継承している。

・2006年にこれまでの成果を「ヒロシマと音楽」のタイトルで出版。2010年より毎年「ヒロシマ・音の記憶」コンサートを行い、普遍性のある優れた音楽作品を紹介している。

・自分が発掘したフィンランドの作曲家エルッキ・アールトネン（1910～90）は1949年に原爆投下をテーマにした交響曲第2番「HIROSHIMA」を作曲し、その年にヘルシンキで初演。1955年には開館したばかりの広島市公会堂で演奏され、好評を得た。今年は被爆70年を記念してこの曲を再演するコンサートを年末に企画している。

☆ 広島における洋楽の歴史（明治から戦前まで）

・戦前の広島は軍都、学都と言われているが、明治期には軍楽隊や学校教育から洋楽が入ってきた。その他に教会やミッション系の学校の宣教師からの流れもある。さらに昭和に入ると放送局ができて、ラジオから広まり、レコード等により大衆化が進む。

・軍楽隊は学校の生徒と一緒に演奏会に参加したり、放送局の番組に出たり、積極的に外に出かけて演奏し、市民にも受け入れられていた。

・高等師範学校・師範学校等の講堂では定例音学会が開かれ、音楽の先生や生徒達が発表したり、外部から音楽家を招いたりしている。

☆ 戦時下の状況

・国家総動員体制になり、どうすれば音楽で国の役に立てるかが問われる。戦意高揚のための音楽や音感を活用した仕事等。戦況が厳しくなると、洋楽等は敵国音楽として抑制されていく。

☆ 戦後の復興期

・純音楽茶房ムシカは1946年にオープンした音楽喫茶。音楽鑑賞の場として、歌声喫茶として、戦後の広島を音楽によって支え続けてきた。広島流川教会も1946年から慈善音楽会や市民クリスマスを開催し、市民を音楽の力で勇気づける。

・1946年、広島の学生たちの合同合唱団「学生音楽連盟」が結成され、日本を代表する音楽家を招いてコンサートを開催。目的は、学校の復興資金を集めたり、広島を音楽で元気にする事だったが、1950年の学制改革により活動の幕を閉じた。

・1947年、広島市主催により平和とヒロシマをテーマにした歌が公募され、選ばれた「ひろしま平和の歌」は同年の第1回平和祭（平和記念式典）から今も歌い継がれている。

・占領下には原爆を非難するような歌は控えられていたが、1952年の独立回復以降は「原爆許すまじ」のような反戦歌も生まれてくる。

<会場より>

・一人の人間が時代の流れの中でどう歌に対していたかという視点も必要。戦時中は一概に抑圧されていたとは言えない。子供たちは軍歌も替え歌にして喜々としていた。戦後、ムシカと対抗するように反体制的なシャンソン喫茶が流行っていた。

<コメント>

戦後の復興に音楽がいかに心の支えとなったかがよくわかった。（編集委員 瀧口信二）

略歴：広島大学大学院博士課程修了（学術博士）、
「ヒロシマ」に関わる音楽の研究と普及活動のほか、「広島音楽史」
編纂プロジェクト主宰



○人物登場：杉川 聡氏 (マリーナホッププロパティ代表取締役会長)

会社のトップとして第1線でバリバリ活躍されている人に初めて登場してもらおう。取材の趣旨をよく理解されており、杉川さんがこちらの質問を誘い出すように淀みなくスムーズに進行した。



略歴：1957年広島生まれ、1980年慶応大学卒、信用金庫入社、1981年第一ビルサービス入社、1985年同社長就任、現在に至る

☆ これまでの軌跡

生まれ育ちは広島で高校卒業後、慶応大学へ。卒業直前に結婚し、信用金庫に就職したが、妻の父親（第一ビルサービス社長）にガンが見つかり、懇願されて23歳で義父の会社に入社。27歳の時、義父が亡くなり社長を引き継ぐ。

人材を派遣するビルの維持管理業務がメインの会社。引き継いだ当時は建設ラッシュと役所の庁舎管理の外注化により急成長していたが、1990年頃からバブルが弾けて頭打ちとなり、業務の拡大を考え始めた。

☆ 業務の拡大

維持管理業務は建物の寿命とともに終わるが、顧客のニーズに対応して20～30年経つと入居率の低下を防ぐための用途変更や40～50年経つと建替えの要望等に応える不動産管理業務に軸足を移す。

会社創立50周年（2013年）を前にして、何か新規企画を！と思っていた矢先に広島マリーナホップ再生の話が飛び込んできた。結果として50周年記念事業となる。

☆ マリーナホップの経営を引き継ぐ

マリーナホップは2005年に開業したが、2008年に経営不振で当初の事業主が撤退し、次の事業主が変わったが再建できず、2012年に第一ビルサービスが経営を引き継ぐ。

当社の事業規模から見て、経営を引き継ぐことはリスクが大きく、どの銀行からも反対されたが、失敗したら個人資産を注ぎ込む覚悟で融資を受けた。

今では再生も順調に進み、宮島航路の新設、ペット連れで買い物できるペットモール、海を望める展望台、遊覧船の運航等を整備し、来場者数・売上高ともに伸びている。近々、都市型的水族館を整備する予定。これまでの家族連れを中心とした子供の遊園地のイメージから大人も楽しめるアミューズメント・パークを目指している。

☆ 広島まちづくり推進協議会

マリーナホップを引き継ぐ時に広島まちづくり推進協議会を発足させ、毎月1回仲間が集まってテナント誘致やイベント等の情報交換を行っている。マリーナホップの再生もあるが、広島のみちを支えるというスタンス。地元の中小企業がここの再生をやりきれるか否かは一つの試金石となる。これからは隣接する広島西飛行場跡地の開発の動きもあり、広島南道路以南のまちづくりについて、この協議会をベースにエリア内の事業者や専門家、行政の人にも声をかけて観音新町活性化委員会を立ち上げたいと思う。

☆ これからの目標

マリーナホップは観光地ではないが、観光中継地にはなれる。広島観光は世界遺産の原爆ドームと宮島で持っているが、後2～3時間滞在が伸びれば、広島泊のコースが組めるという。駐車場・土産物店・食事処が整っていることが観光地の条件とされるが、ここはそろっている。原爆ドームと宮島の中継地として、食事を取り、水族館を見て、買い物をして3時間は過ごせる。海が見える立地を最大限活かして、ここと飛行場跡地を一体的に整備できれば、テーマパークも夢ではない。息子が後継者として戻ってくれたので、子や孫のために広島のみちを良くしておきたいという気持ちが強くなった。

コメント 「マリーナホップはお祖父ちゃん達が作ったんよ」と孫に自慢したいがためにやっているようなものという最後の言葉が余韻として残る。

広島トップランナーとしてリスクを恐れず、果敢に立ち向かっていく姿勢に共鳴した。後続のランナーが次々に現れて広島のみちが変わっていくことを期待したい。

聞き手：編集委員 前岡智之、瀧口信二（文責）

○ひろしま市民ひろばの提案！

2011年に広島市中央公園アイデアコンペを終え、地元の建築家として何か提案しなければという思いから、日本建築家協会中国支部広島地域会のまちづくり委員会で検討し、ひろしまのランドデザイン「ひろしま市民ひろば」をまとめた。2013年3月に広島市に報告し、各種イベントにおける展示・発表等で多くの意見をいただき、現在見直し中である。さらに議論の場を広げるため、具体の提案内容をシリーズで紹介していきたい。

提案4. 公共施設の再整備

丹下健三氏は、「広島平和記念公園」の設計に際し、「平和を作り出す工場でありたい」という言葉を残した。これには「平和都市というものを指向するならば、単に平和を祈念するだけでは足りない。次世代の育成など市民生活に深く根差した何かによって、継続的かつ能動的に平和に貢献する機能を携えていなければならない。」という強い意志が感じられる。

この一帯には現在、広島市青少年センター、広島市子ども文化科学館、ファミリープール、グリーンアリーナ、広島市中央図書館等が並ぶ。「ひろしま市民ひろば」の提案には、多くは老朽化しているこれらの施設を、ひろばを囲む形で再編することを盛り込んだ。

私たちは旧市民球場跡地が持つべき役割として、市民の生活に根差した場であると同時に、国際交流の場であることと考える。

戦後70年を経て、広島は悲惨な焼け跡から文化的生活が営める街へと復興を果たした。そしてこのエリアの施設は、他の都市と変わらない平凡なものになった。しかし再編にあたって、「平和を生み出す工場」であることを求めるならば、現在と同様の平和と文化を享受できる場をつくるだけでは充分とは言えない。

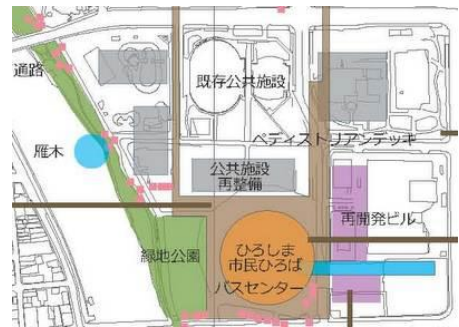
広島平和記念公園を訪れる海外の観光客は特筆すべき数である。彼らはここで膨大な資料を見聴きし帰っていく。しかし、原爆で死んでいった人々が自分たちと同じ人間であり、自分も同じ被爆者となる可能性があることをどれほどの人が切実に思い、また戦争によって他国の人間を殺すことは絶対に嫌だと思っただろうか。

ここに国際交流の意味が生まれる。そこで死んでいった人々の文化的背景やその国の今を生きる人々の姿に触れることが、その死にリアリティを与える。そのために「平和を生み出す工場」に求められるのが、国際交流力を育むということである。

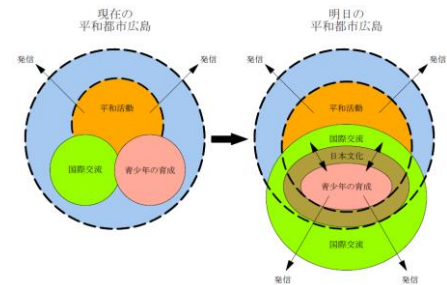
そこで、このエリアが備えていた青少年育成のための機能に加え、日本文化に親しむことを主題として再編することを提案する。その狙いの一つ目は、国際交流にあっては自国の文化を知った上で他国との違いを理解することが大前提だが、この点で日本の青少年に欠ける自国文化に対する知識を補うこと。二つ目はこのエリアに観光客を招き入れ、青少年ボランティアが日本文化を紹介する場を設けて実際の交流を生むこと。三つ目は先に述べたように国際交流により広島の悲劇にリアリティを与えること、である。

この再編により、広島は新たな役割を持って平和都市としての責任を果たすことができるだろう。広島のあるいは広島を訪れる青少年が国際交流への理解を深め、彼ら自身が「平和を生み出す工場」として歩き始めることを期待したい。

(JIA 広島地域会まちづくり委員会メンバー 高橋幸子)



公共施設の再整備（灰色部分）



明日の平和都市広島のイメージ

□ほっとコーナー 『子どもと一緒にボランティア』

姉妹都市クラブ 代表 谷川ゆかり

会社員として働きながら、国際交流のボランティアグループの代表をしています。現在は5歳の息子の母でもあります。この他に海外から平和学習などで広島を訪れる方のホームステイを受け入れるグループにも入っていて、休日を利用して国際交流のイベントやホームステイの受け入れをしています。こう説明すると、「小さいお子さんがいるのによくボランティアをしているね」と言われます。確かに子育ては楽しいけれども大変。私も以前は仕事とボランティアで精一杯で、子育てをしながらのボランティア活動を想像できませんでした。そんな私でしたが、8年前に広島市の姉妹都市のひとつ、韓国の大邱広域市でホームステイをする機会がありました。ホストファミリーは3人の小さなお子さんがある家庭で、一緒に買い物に行ったり料理をしたり、同じように子供がいるボランティア仲間を集めて交流会をしてくれました。その体験を通じてボランティアは子供も一緒に気軽な感じでもいいのだなと少し気持ちが楽になりました。実際、私に子供が生まれてから活動を縮小している部分もありますが、短期間のホームステイを受け入れたり、子供も参加できるような国際交流のイベントには息子を連れて行ったりと親子で楽しんでいます。私のまわりでも子育て中のボランティア仲間が増えていくといいなと思っています。



留学生と一緒に

○金沢市における「こまちなみ」保存政策について

広島諸事・地域再生研究所主宰 石丸紀興

はじめに

本紙において連載されている可部地区や海田市地区など広島周辺での「歴史的街並み」（「町並み」、「まちなみ」といくつか表現できるがそれぞれの慣用に従う）に関する記述に気づかれている方も多いと思うが、そもそもこの連載の原点は金沢市における「こまちなみ保存政策」にヒントを得ている。広島でもそのような観点で街並みを発掘しておこうということであった。

金沢市の街並み

金沢市には歴史的な街並みとして有名ないわゆる「東の茶屋町」があり、最近脚光を浴びてきた「主計町（かぞえまち）地区」「卯辰山麓地区」「寺町台地区」がある。これらは「文化財保護法」に基づいて指定される「伝統的建造物群保存地区」（いわゆる伝建地区）にあたり、平成13年における「東山ひがし重要伝統的建造物群保存地区」指定に始まり、平成20年から24年にかけて「主計町」「辰巳山麓」「寺町台」が相次いで重伝建として指定されてきた。すなわちこれらは国の政策に裏打ちされて保存・整備等の政策が展開されているのであり、ある意味では軌道に乗っているといえる。

ところが金沢にはそういった「すごい」レベルの街並みだけでなく、裏通りやかつての通りなどの市内のあちこちに「ちょっとした良いまち並み」「ちょっといい町」が存在する。そしてそこに新たな政策が展開されている。

「こまちなみ」という考え方

平成4年3月に金沢市教育委員会／金沢市伝統的建造物・町並み調査委員会で「金沢の歴史的建築と町並み」という報告書をまとめており、その中で歴史的建造物の基礎調査をしっかりと進め、更にその群構成としての町並みを発掘して様々な観点で実態を明らかにしている。特に町並みの実態としては、武士系住宅群、足軽系住宅群という観点でまとめている。さらに、



東の茶屋町（撮影筆者）

「金沢の町並み保存の新しい展開として『こまちなみの保存』を提案したい」として、全国的にもユニークな考え方を提起していて、「こまちなみ」を指定し、守り、育てていこうというのである。こまちなみの説明として「こまちなみとは、第1に、国による伝統的建造物群保存地区指定で行う町並み保存の対象となるほど、面的な広がり、質的な純粋性をもたないが、城下町らしい、その名のように、ちょっとしたよい町並みを指す。つまり、こまちなみとは、城下町のあちこちに残るよい町並みの風景を評価するための言葉である」としている。さらに付け加えて「もちろんこまちなみは、町並みとして美しいという感動は必要であるが、ここでは家並みがそろっているという純粋性よりも、いきいきとした生活感を重視したい。町並みが残っているということは伝統的な家を大切にしてきた人たちがいまも住んでいるということであり、古い町の生活が生きているということである。住んでいる人たちとその町の連続性が重要なのである。」と重ねてその意義を説いている。

すなわち、伝建地区とは別の「こまちなみ保存」の考え方が生まれ、伝建地区の金沢市版ともいえる制度を、平成6年3月23日に制定の「金沢市こまちなみ保全条例」によって確立した。条例では「こまちなみ」を、「歴史的な価値を有する武家屋敷、町家、寺院その他の建造物又はこれらの様式を継承した建造物が集積した歴史的な特徴を残すまちなみ」と定義し、金沢市民に対して「市民共通の貴重な財産であることを認識し、相互に連携及び協力して、これらのこまちなみを保存育成」する旨の努力義務（第4条1項）を定めている。



旧新町区域

こまちなみは、平成10年10月現在で里見町区域、旧新町区域、大野町区域、旧観音町区域など8地区、約22.7haであったが、平成14年4月現在では旧蛤坂町・旧泉寺町区域、旧彦三一番丁・旧母衣町区域等を加えて10地区、約35.5haに広がっている。これらは武士系と町家系に大きく分けられており、面白いのは指定区域の呼び方において旧町名を復活させていることであり、こまちなみがある意味では金沢の歴史的継承性の大きな役割を果たしているといえる。なお旧観音町区域は平成23年4月1日付で卯辰山麓伝建地区に編入され、平成24年4月1日付で旧蛤坂町・泉寺町区域の大半が寺町台伝建地区に移行したので、こまちなみと伝建地区の連続性もうかがえる。

こまちなみということの特異性

だれしも「すごい」と思うものは大切にしようとするが、「いまいち」と思うものは必ずしも評価しないであろう。「いまいち」の町並みも「大したことはない」とされれば長期的には消えていくかもしれない。しかし「いまいち」を「ちょっといい」と考え直すなら、少し話が違ってくる。町並みも「ちょっとした町並み」と評価が高まり、可能な限りの保存措置を講じようとするであろう。



旧天神町区域

すなわち大半の都市では見過ごしてきた町並みでも、金沢では丁重に扱い、今まで可能な範囲で持ちこたえてきたということである。

ここでどのような保存措置が講じられているかといった点についての詳細は省略するが、金沢でこんなに面白い政策が展開されているよ、という紹介だけさせていただき、広島でもなんらかの可能性があるのでどうか、ヒントにして欲しいのである。

確かに金沢の町並みのレベルは、「こまちなみ」といっても高いかもしれない。広島では「こまちなみ」にも及ばない「こ・こまちなみ」あるいは「微・こまちなみ」なのかもしれない。しかし、被爆都市広島にあっては歴史的な町並みの多くは消え去っているのであるから、今も残っている町並みは、それ故に極めて重要な町並みといえるかもしれない。金沢市の努力を参考にしつつ、広島のことを考えてみようではないか、ということである。「大したことはない」と考える前に、「ちょっといい」かもしれないという発想法が広島の人にできるかどうかである。

参考文献

- 1) 石川県土木部都市計画課著・編「石川県の都市計画」（昭和56年4月）

- 2) 金沢市教育委員会／金沢市伝統的建造物・町並み調査委員会著「金沢の歴史的建築と町並み」(平成4年3月)
- 3) インターネットによる「こまちなみの保存」、写真は金沢市歴史都市推進室撮影のもの。
http://www4.city.kanazawa.lg.jp/11107/keikan/jourei/komachi/ko_top.html

○読者からの投稿

前号の巻頭言を読んで

岩月邦文(名古屋市在住)

毎回配信を楽しみにしています。真摯に取り組まれている広島の皆様へ敬意を表しています。第18号被爆70周年記念特集号は今まで以上に読み応えがありました。特に平岡敬氏の「成長信仰からの脱却」には大いに頷けられるものがありました。現在私も地域活動に拘わらせていただいております。地域や区政の方々と係わる中で私が思っている本来あるべき姿とのギャップやある意味諦め・義務的な活動に疑問を抱いております。平岡氏がいう「地域のあり方を問うことから始めなくてはならない」、「人間の生活の『場』づくりへの転換」を図るために「自分たちが地域住民としてどうかかわるか、という意識を持たねばならない」また「その主体性の確立が公共事業頼み(行政頼み)でない地域づくりのカギとなる」という結びに勇気付けられると同時に更なる地域活動への地域住民による主体性の確立に貢献していきたいと改めて思った次第であります。

□編集後記

前号の被爆70周年記念特集は、いかがでしたか？

8月6日は「平和の鐘」響け再び記念式に参加して私の70周年を迎えました。時にテレビを見ていると驚く発見をすることがあります。

関川英雄が監督し、広島出身の月丘夢路が出演した映画「ひろしま」の制作エピソードが放送されました。被爆7年目の製作で、手弁当のエキストラは88,500人、小道具として戦時中の服装や鉄兜などが県下の市町村住民から4,000余点が寄せられたそうです。当時の社会的背景から、この映画は、映画会社の配給を見送られました。

助監督をされた小林大平さんの息子の一平さんが草の根活動により各地で上映を続け、一平さんが亡くなったあと現在はご子息の開さんが受け継いでいるとのこと。このことに興味を持ってYouTubeで予告編を見たのですが、発見はその時です。画像にもバック音にもあの2代目「平和の鐘」が鳴らされていたのです。急いでDVDを探しにビデオ店に走ったのはご想像の通り。
 (編集委員 前岡智之)

***メルマガを読まれての感想や質問及びひろしまのまちづくりについて皆さんの自由な提案・意見をお聞かせください！**

(投稿は500字程度以内でお願いします)

編集委員

石丸紀興	広島諸事・地域再生研究所主宰
高東博視	心豊かな家庭環境をつくる広島21理事
瀧口信二	広島アイデアコンペ実行委員会事務局
通谷 章	ガリバープロダクツ代表
前岡智之	中国セントラルコンサルタント代表
三宅恭次	元中国放送役員